

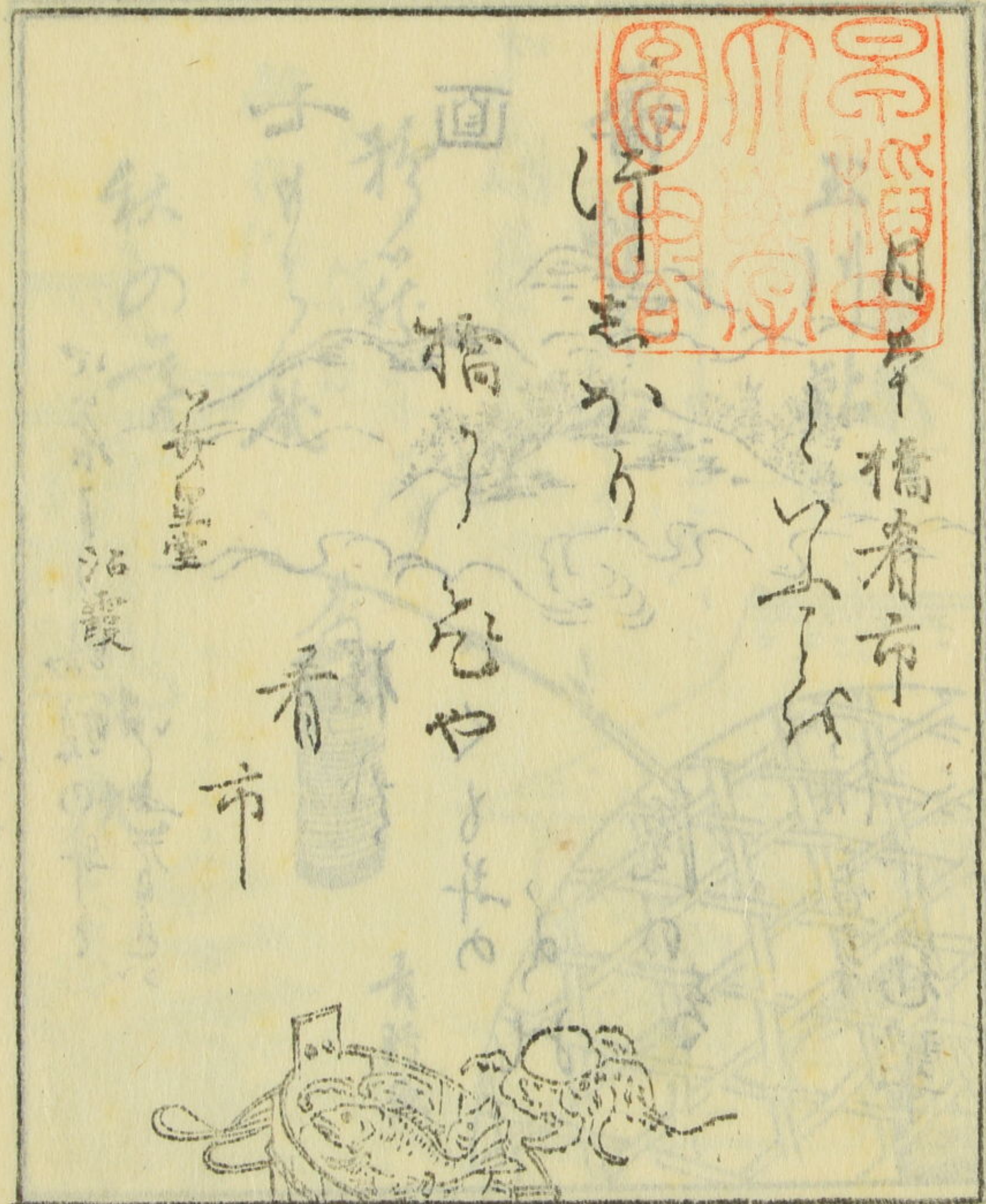


多岐の志  
下

5  
4464  
3



門 へ 5  
號 4464  
巻 3



昭和九年十月八日  
購末

1104  
3

七面裸



はるの  
あけの  
つゆの  
あけ

橋

くも

の

あけ

清

冠翠

五川

結

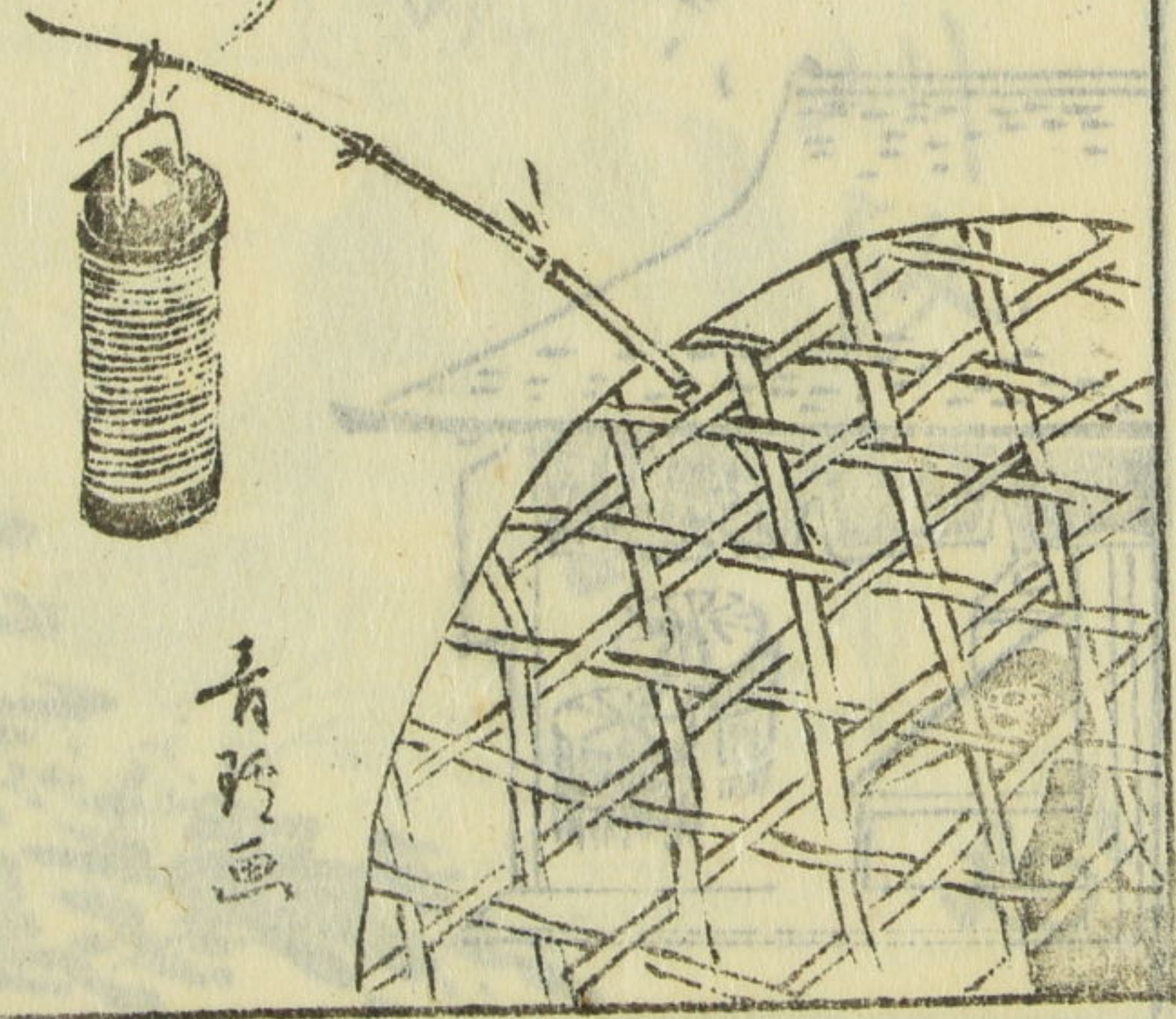
物

の

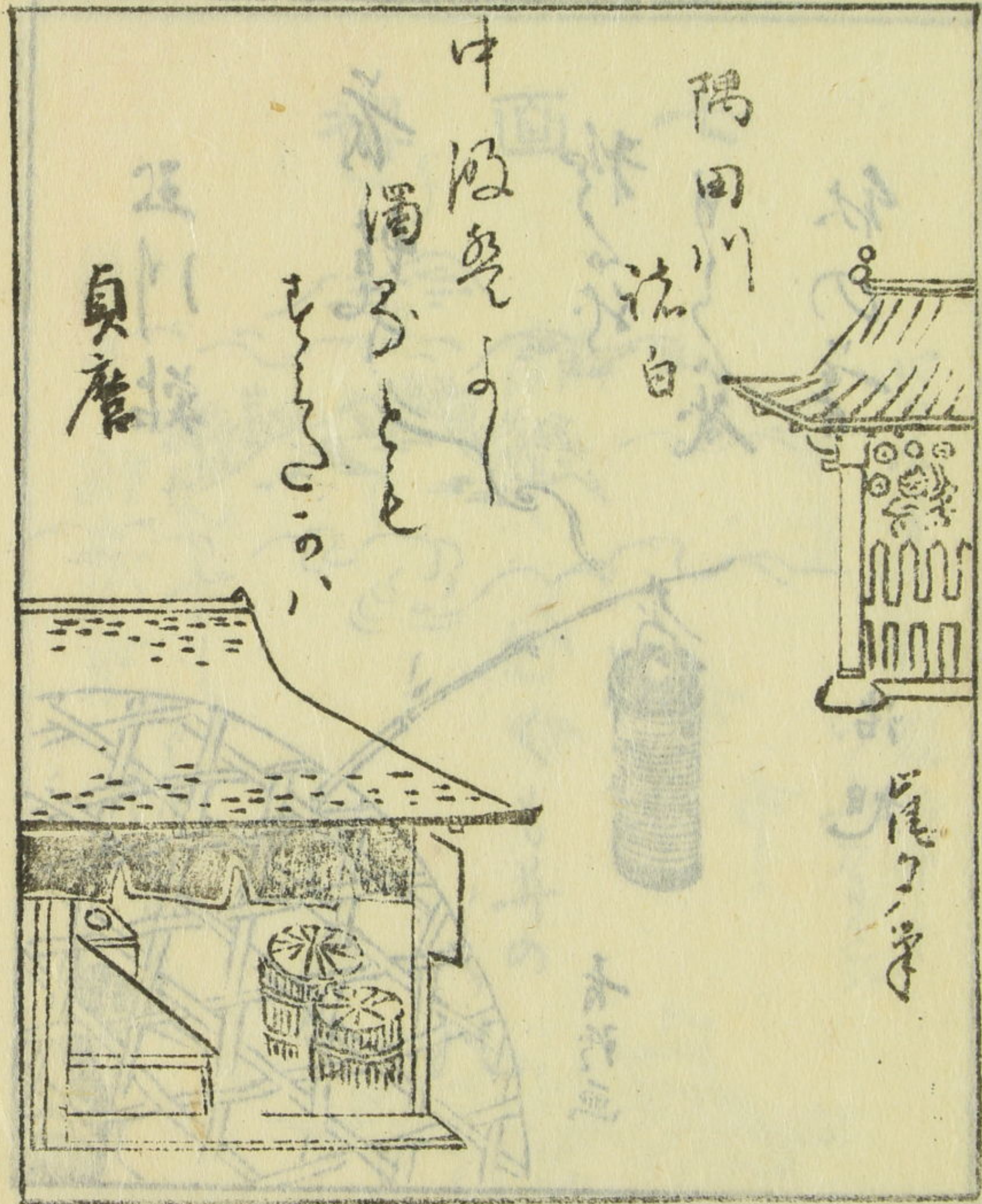
秋

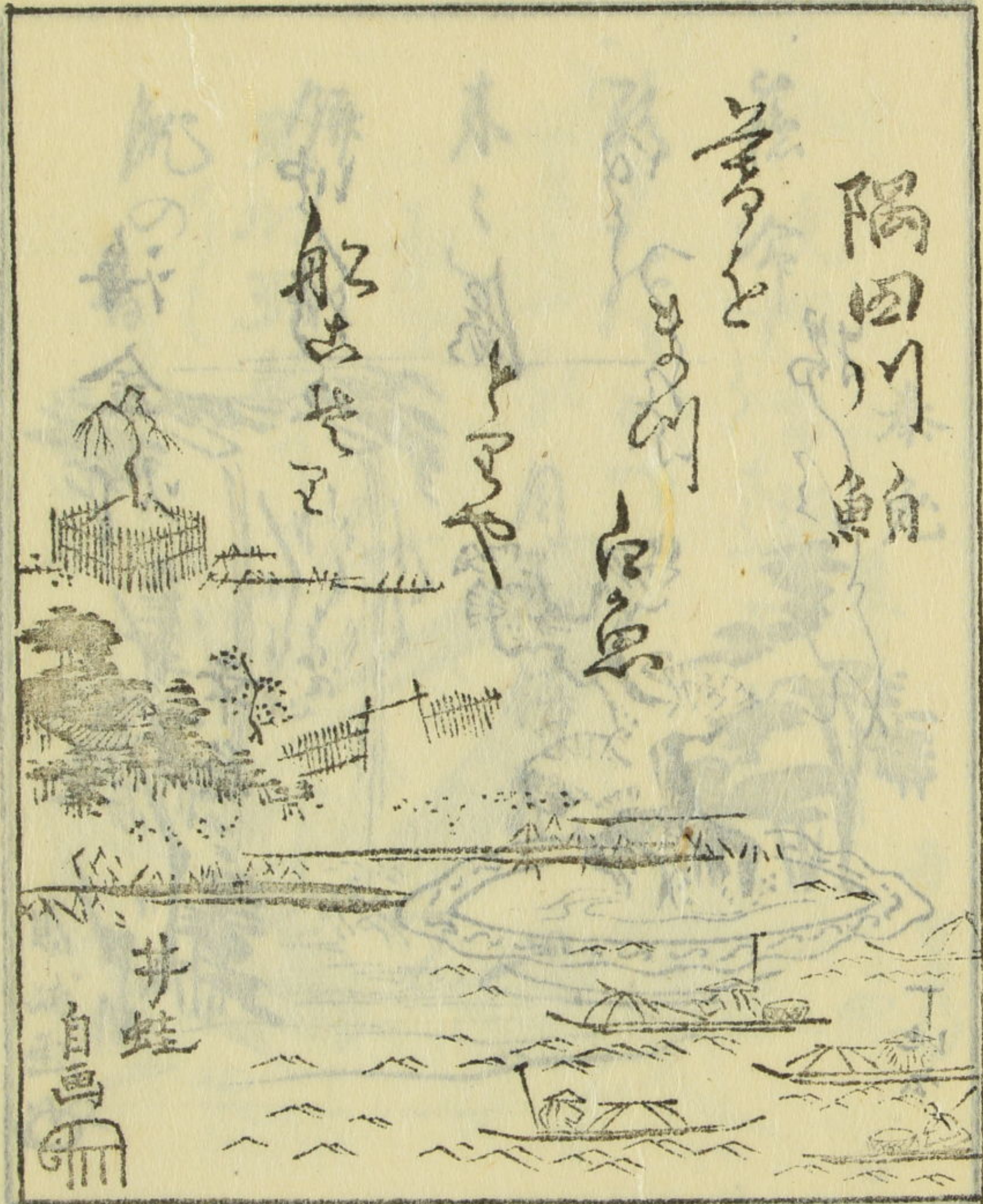
旭

青

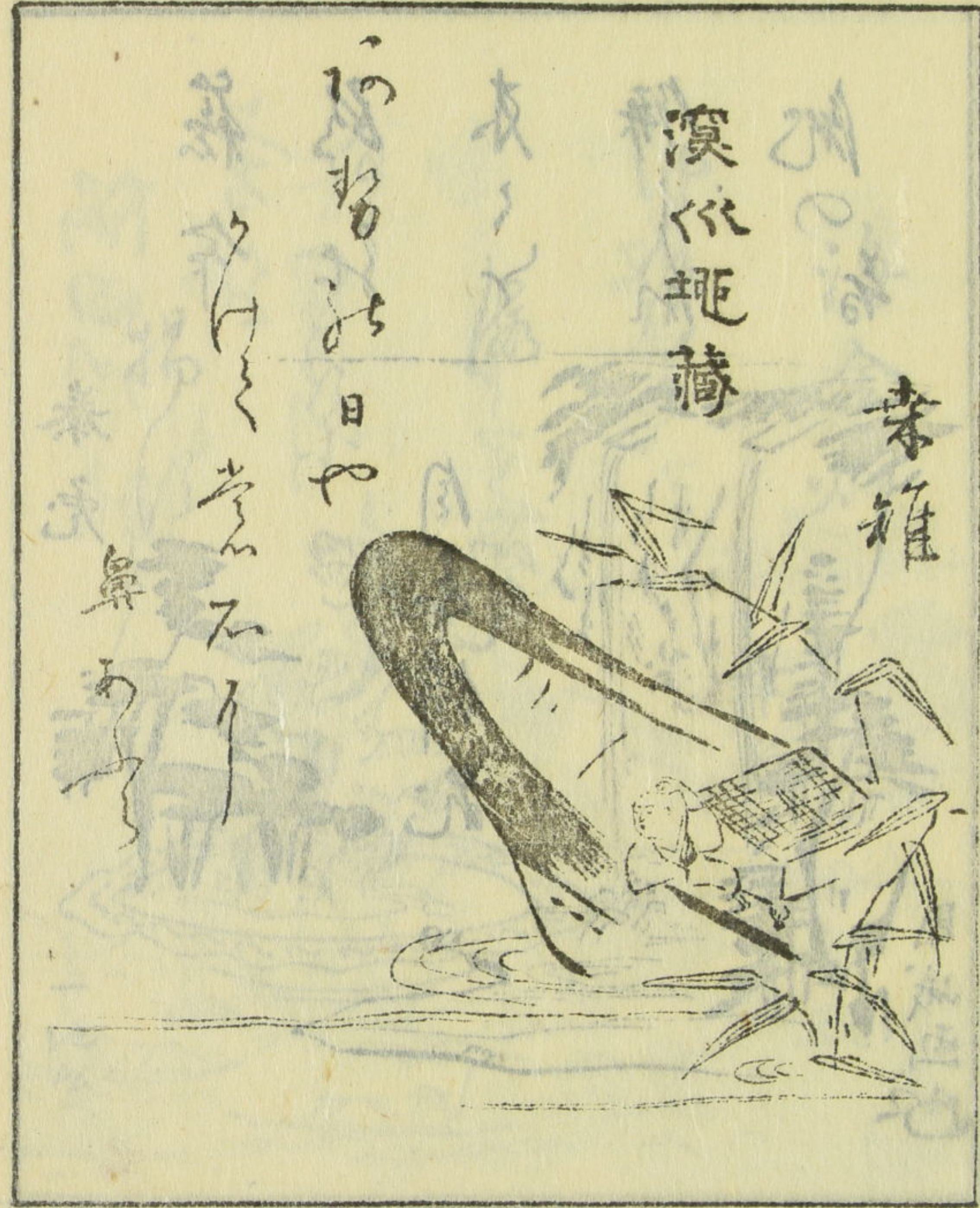


下



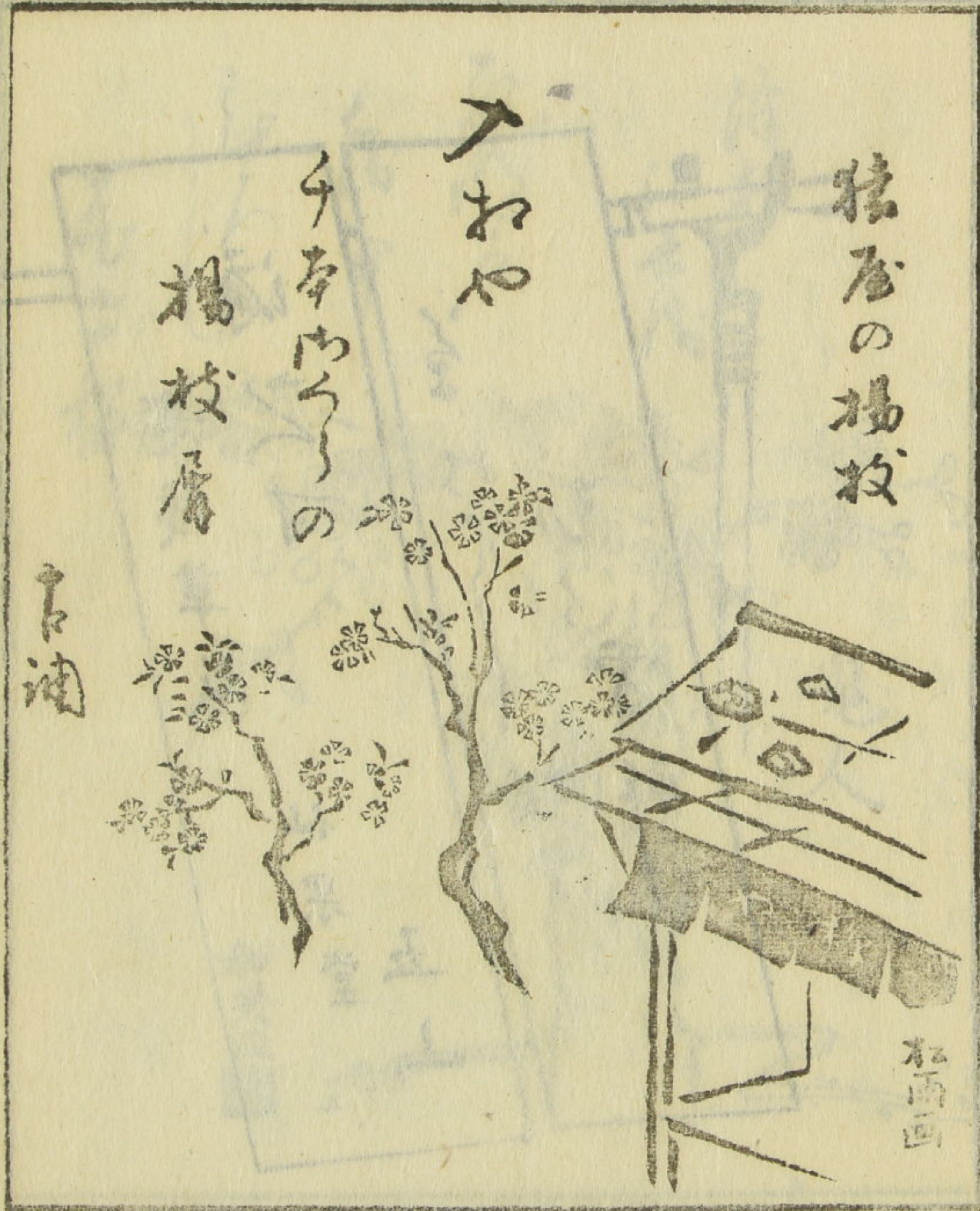


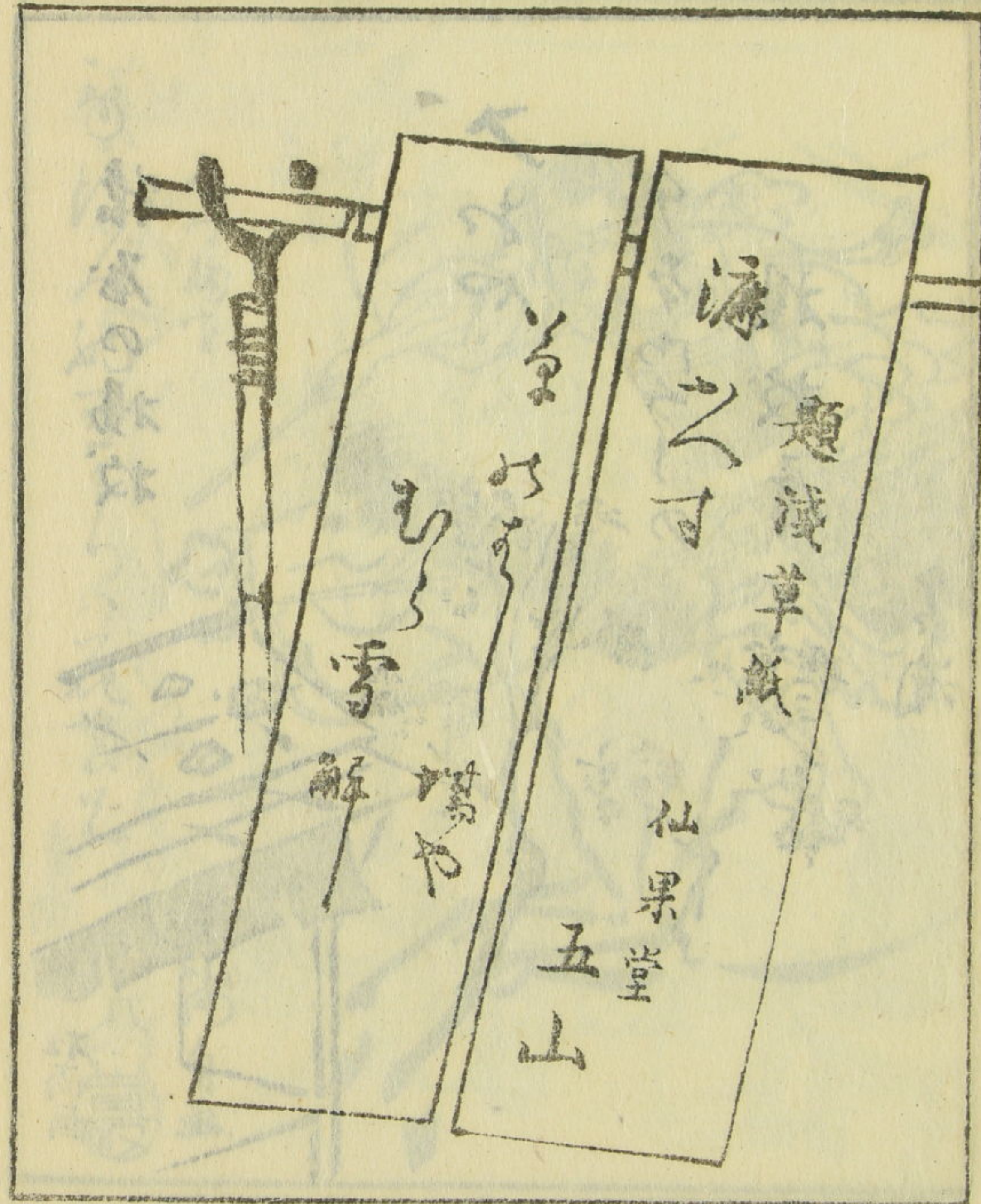






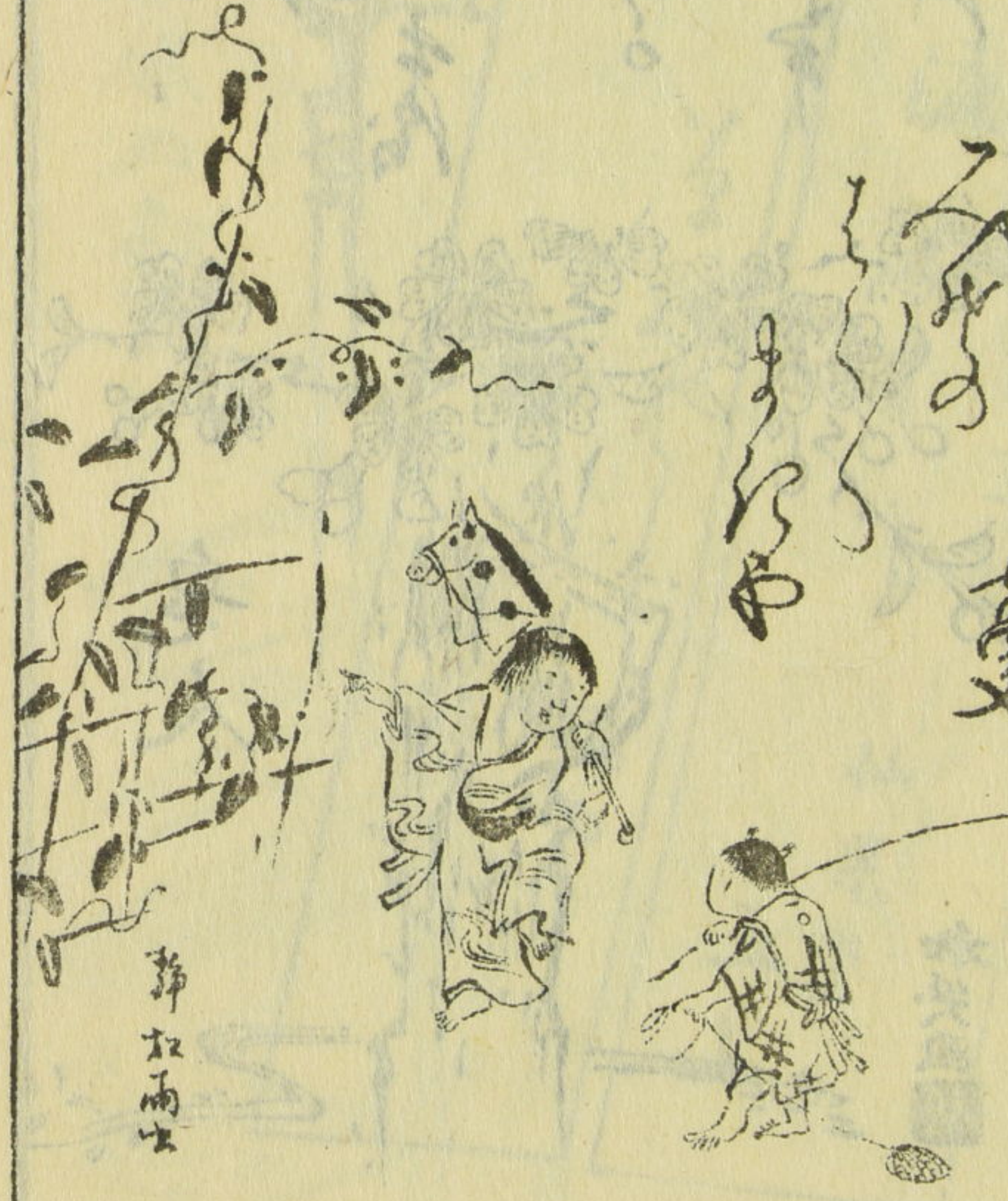






味也皆作

物乃ぬこ  
蔓  
赤朴



静和雨止

湯島唐人

神女

陽信

編里

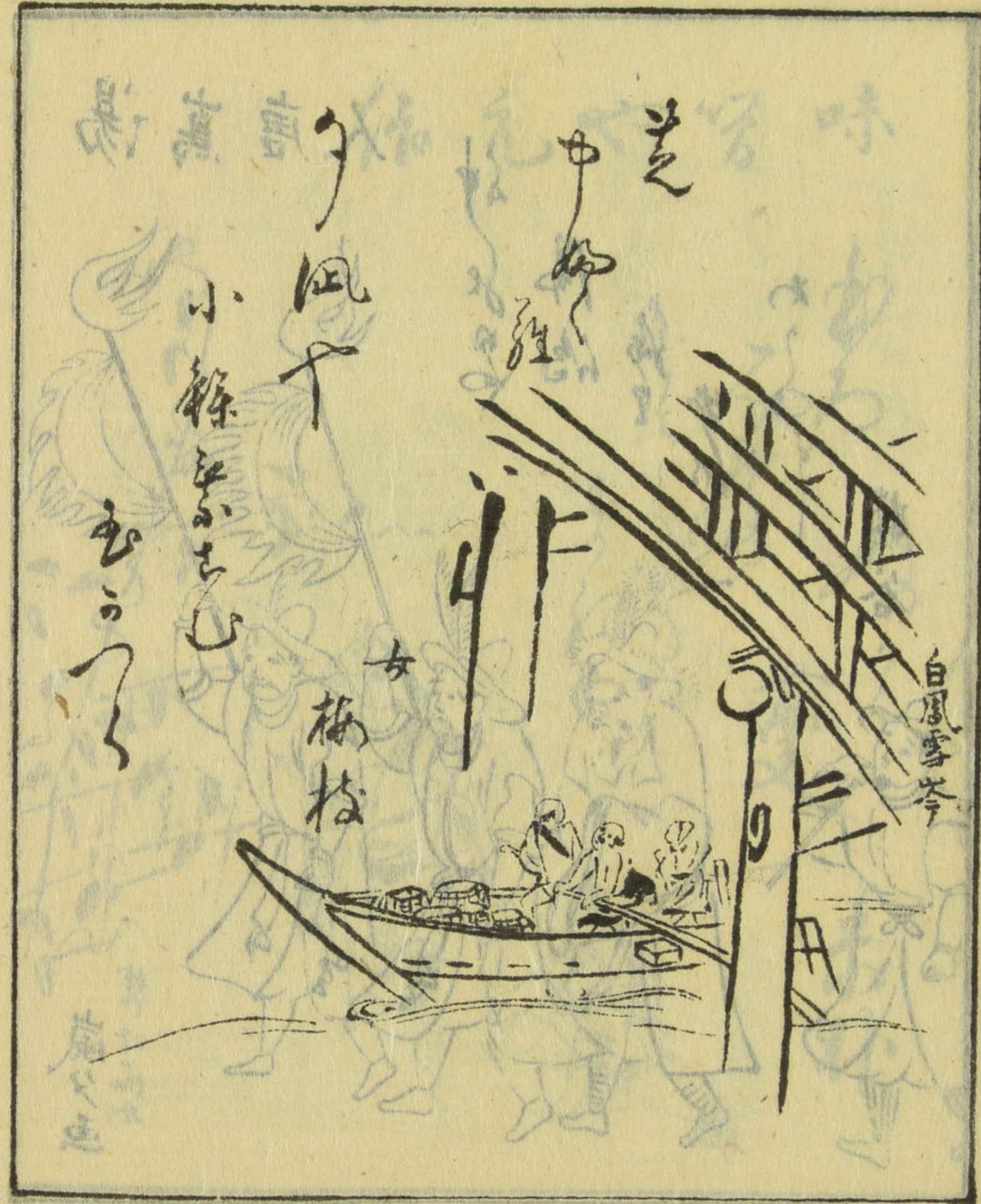
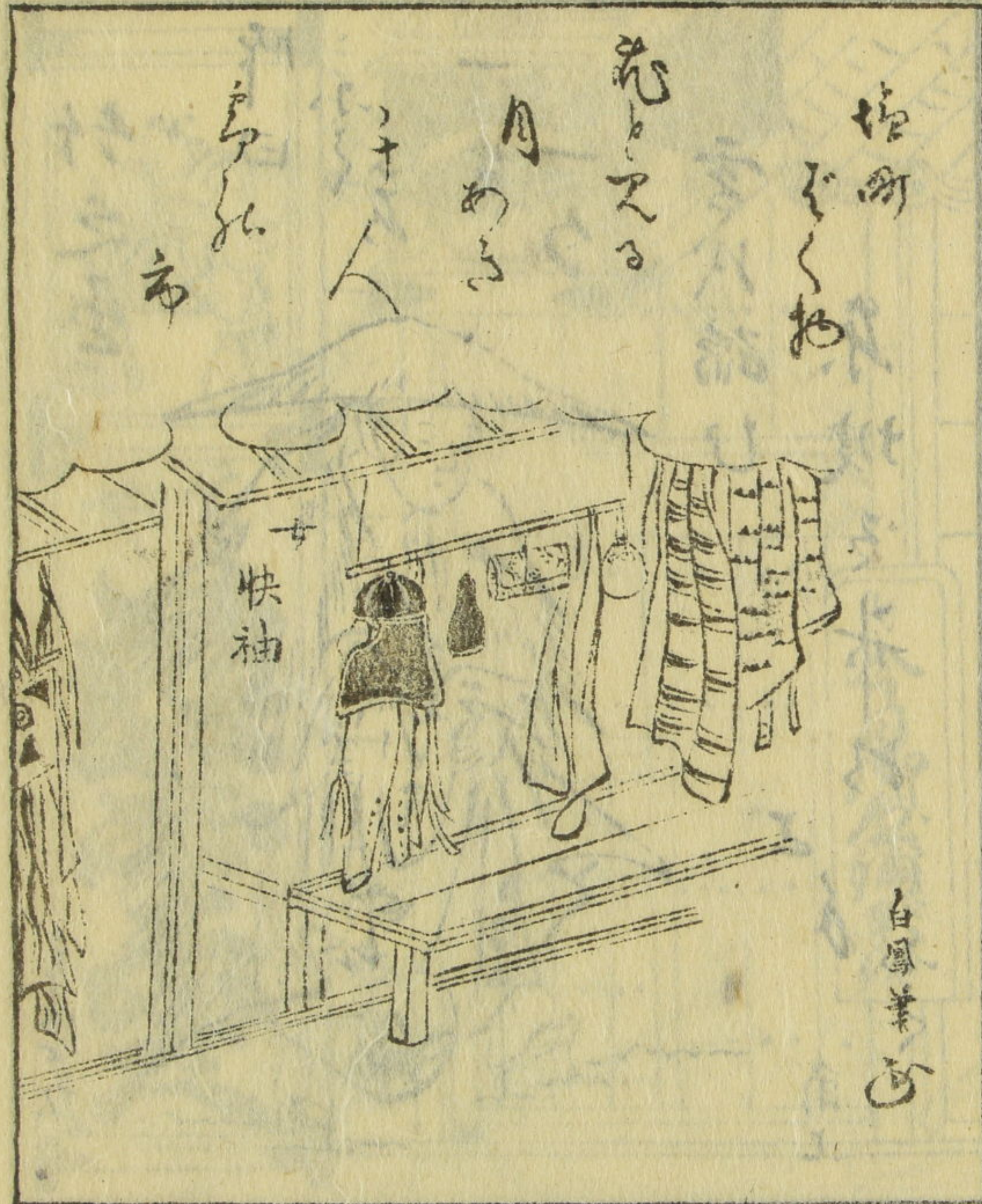
出

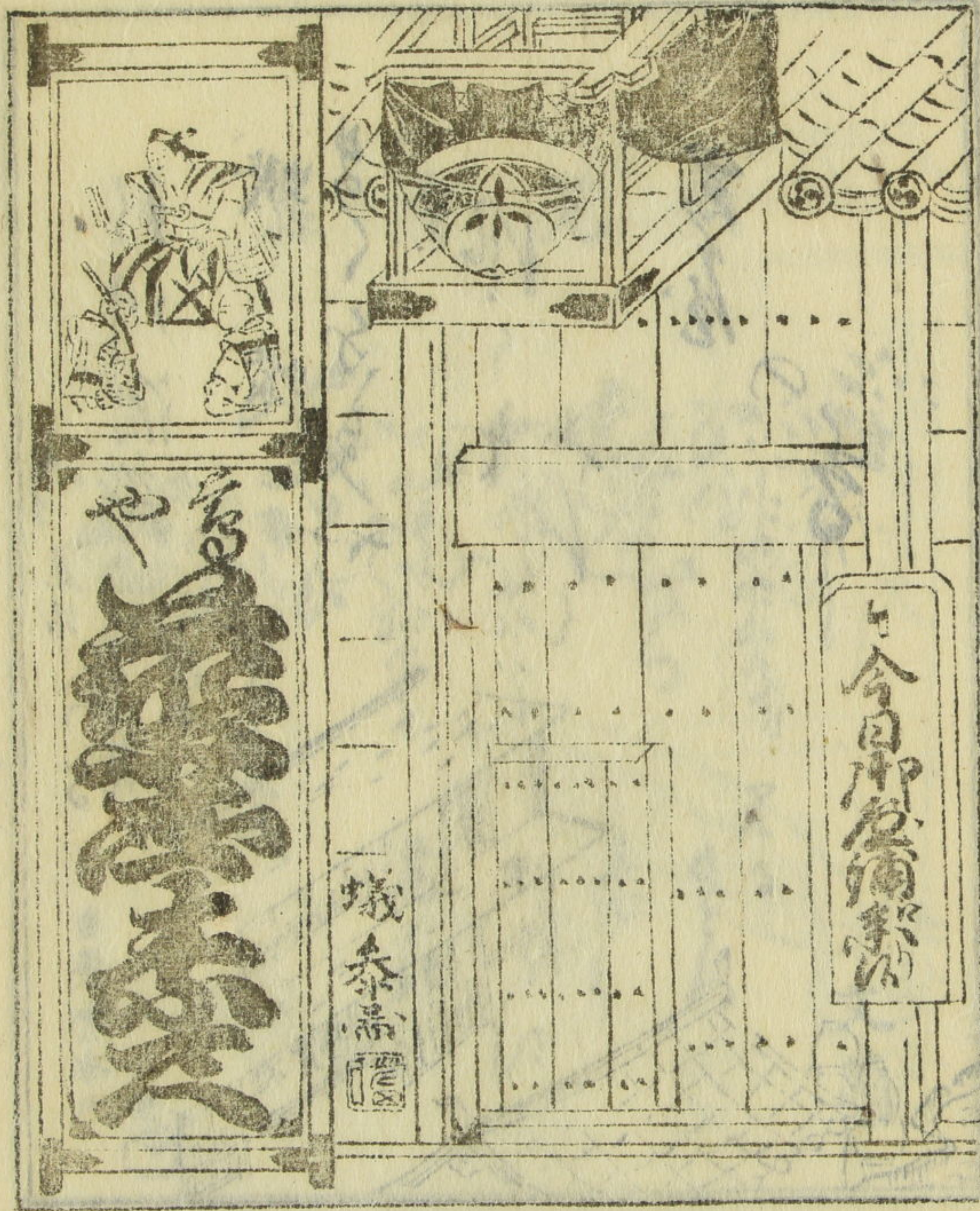
あし

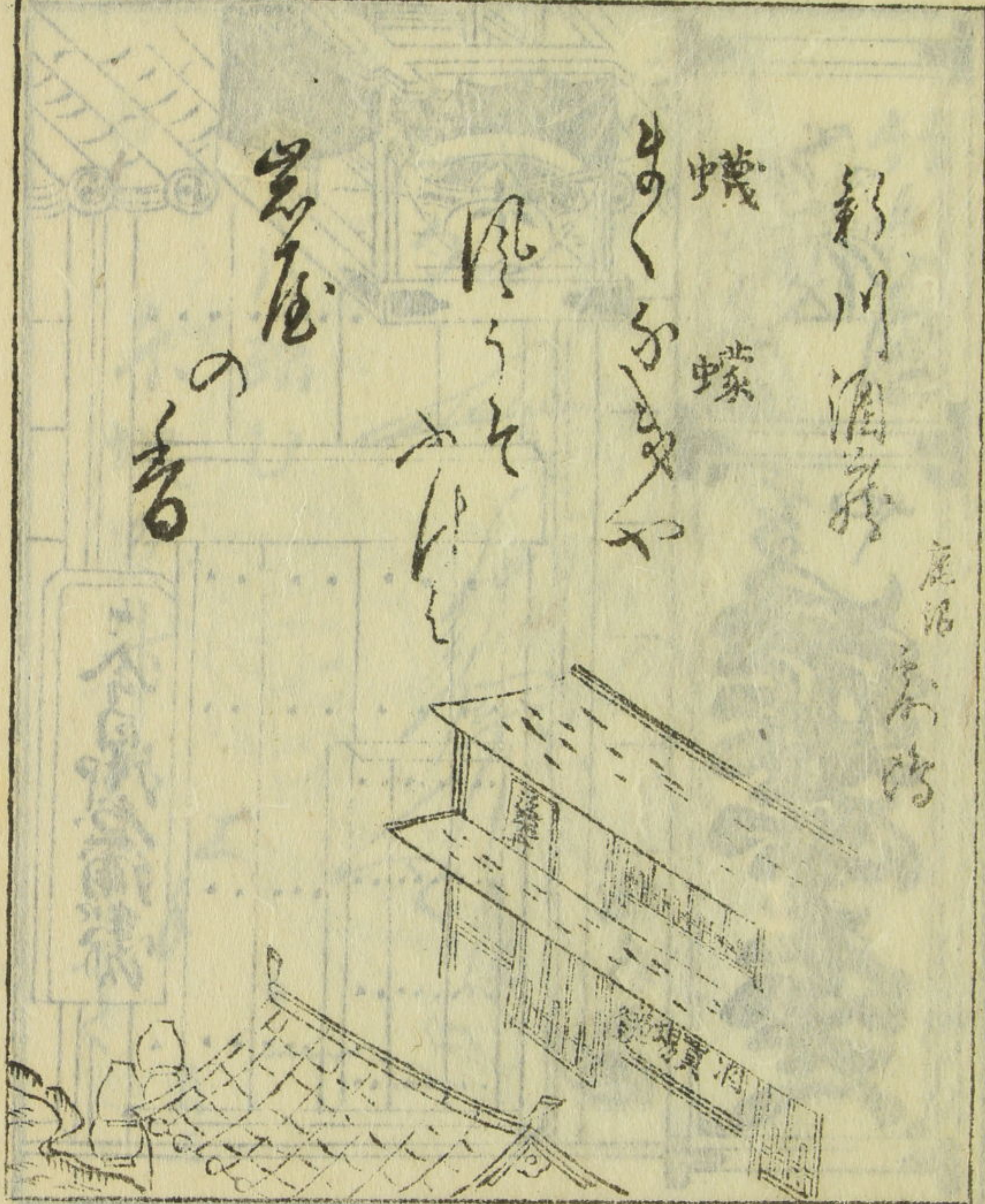
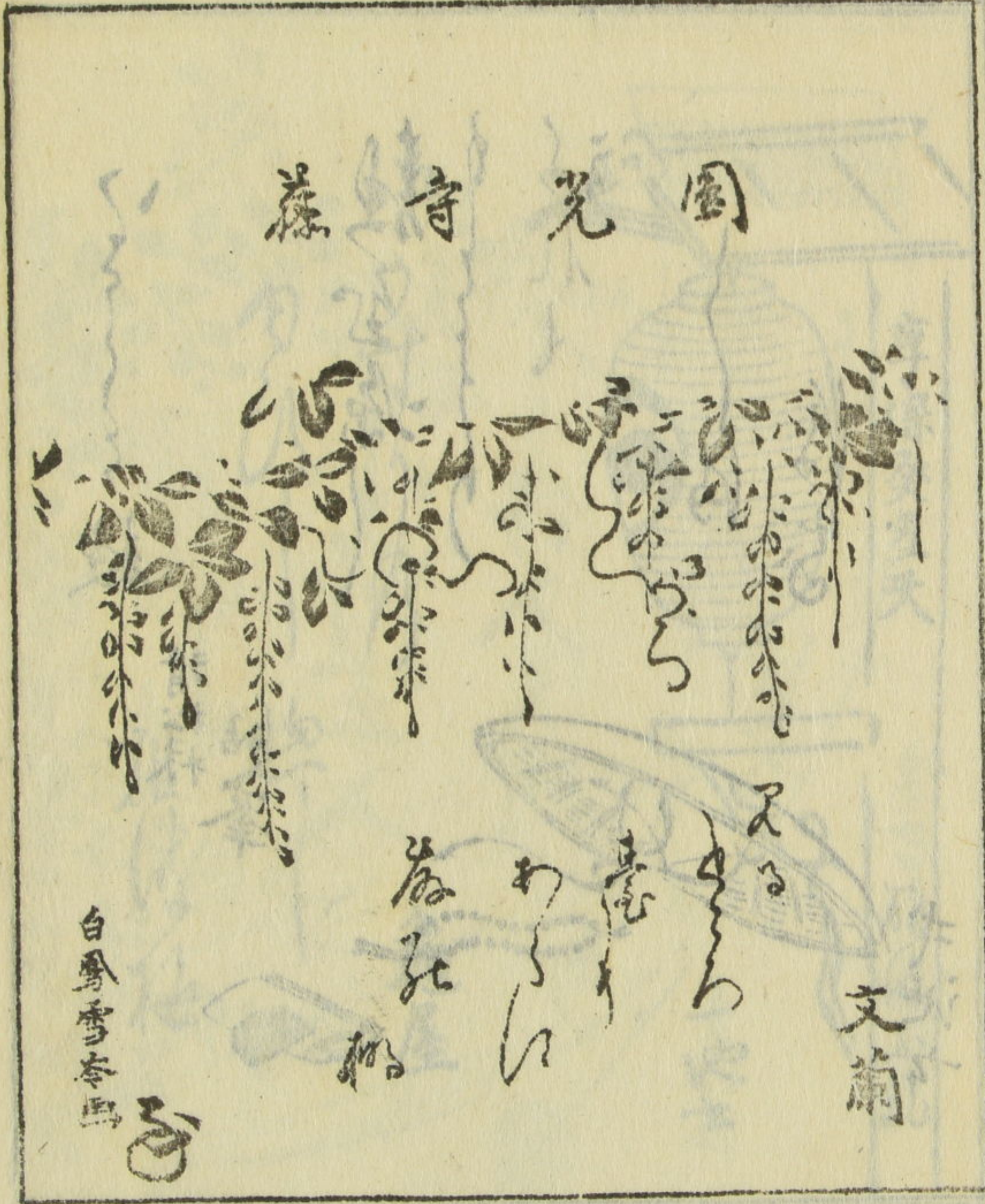
麟谷

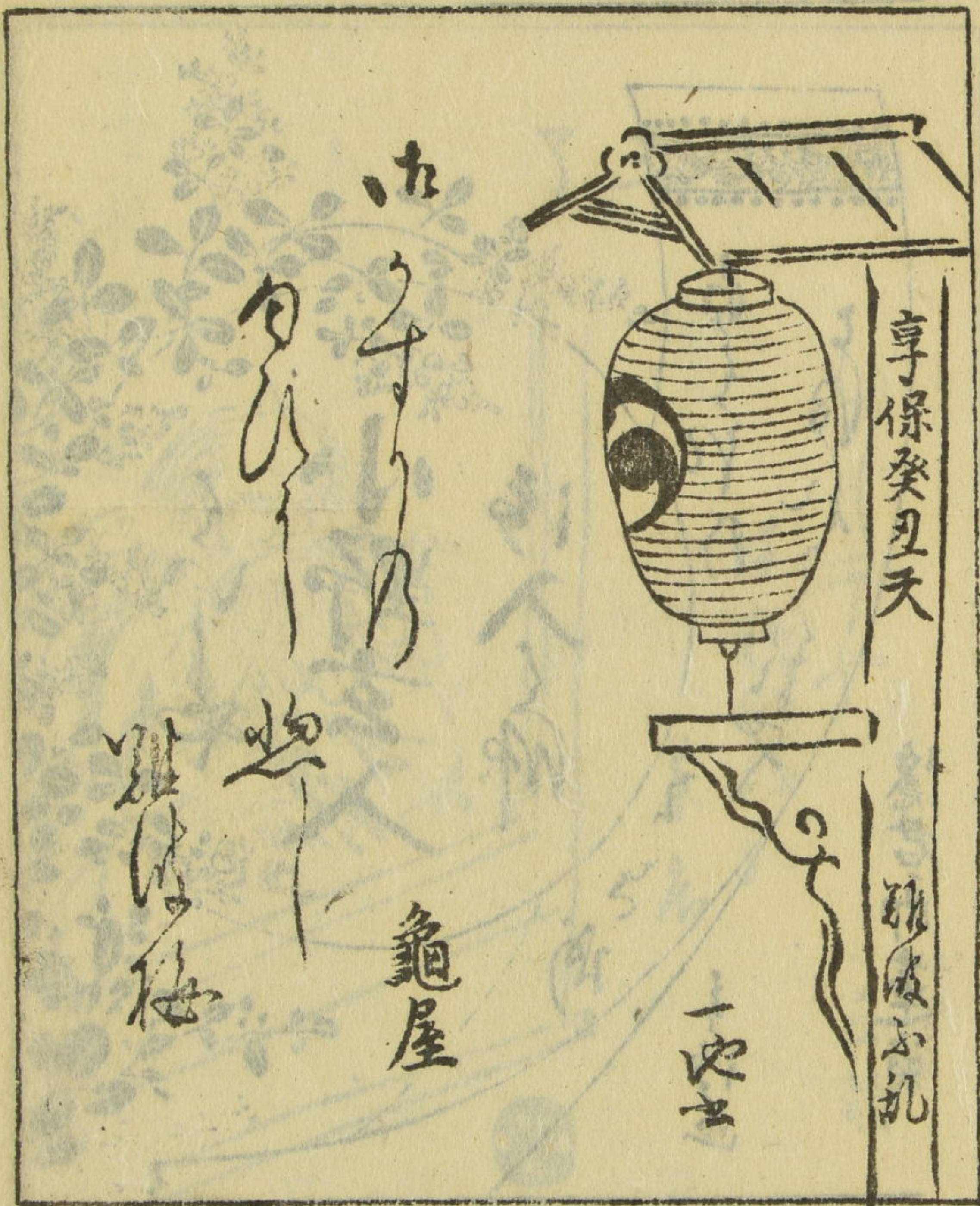


嵐夕画









桐山三了

白鳳雪琴画



しー千や

茶店

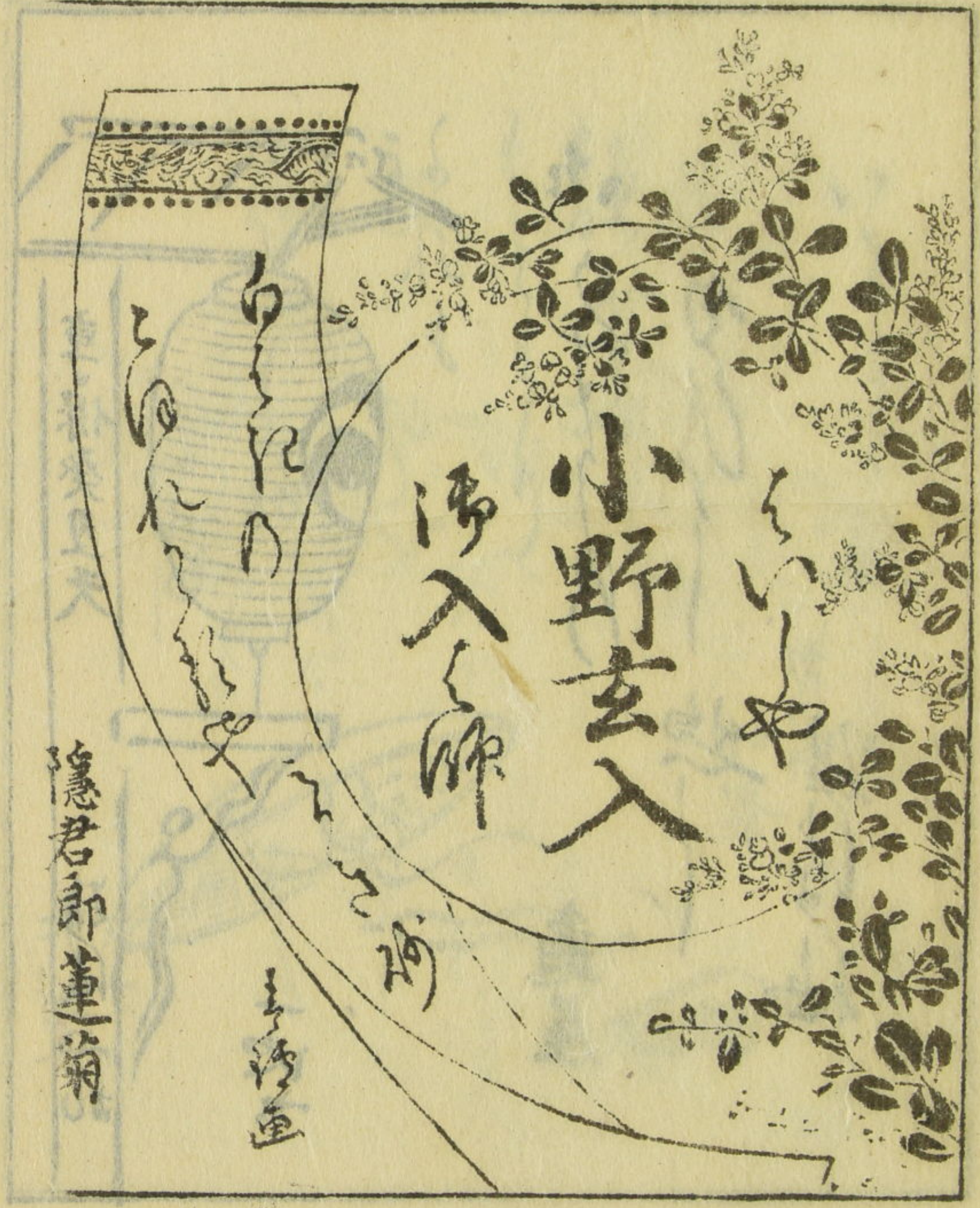
五翁



隱君郎蓮菊

三河

小野玄入  
海入之師









上人の府

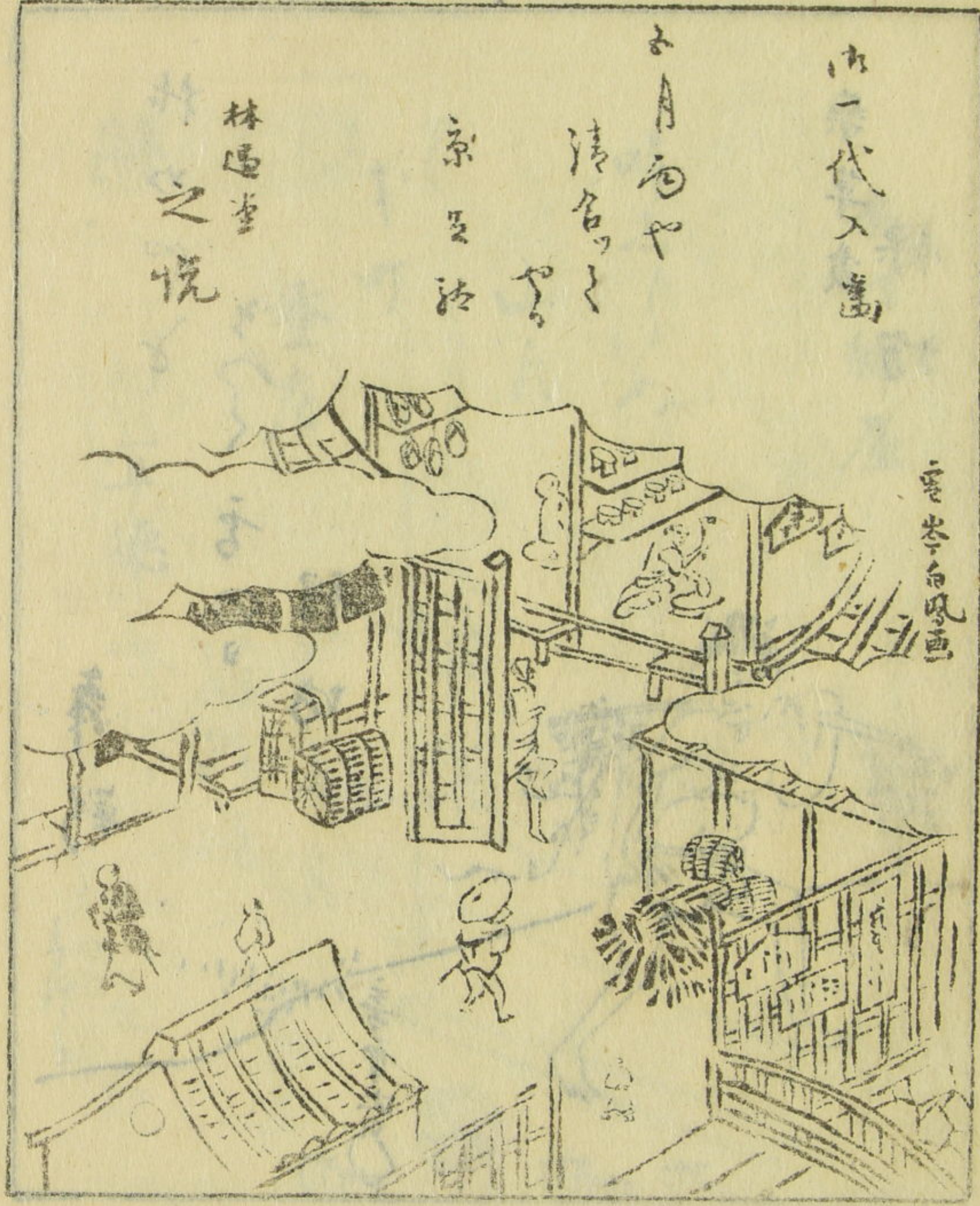
あまのほろ

あまのほろ

人あはれ

催鼓

雪峯画



水一代入画

小月舟や

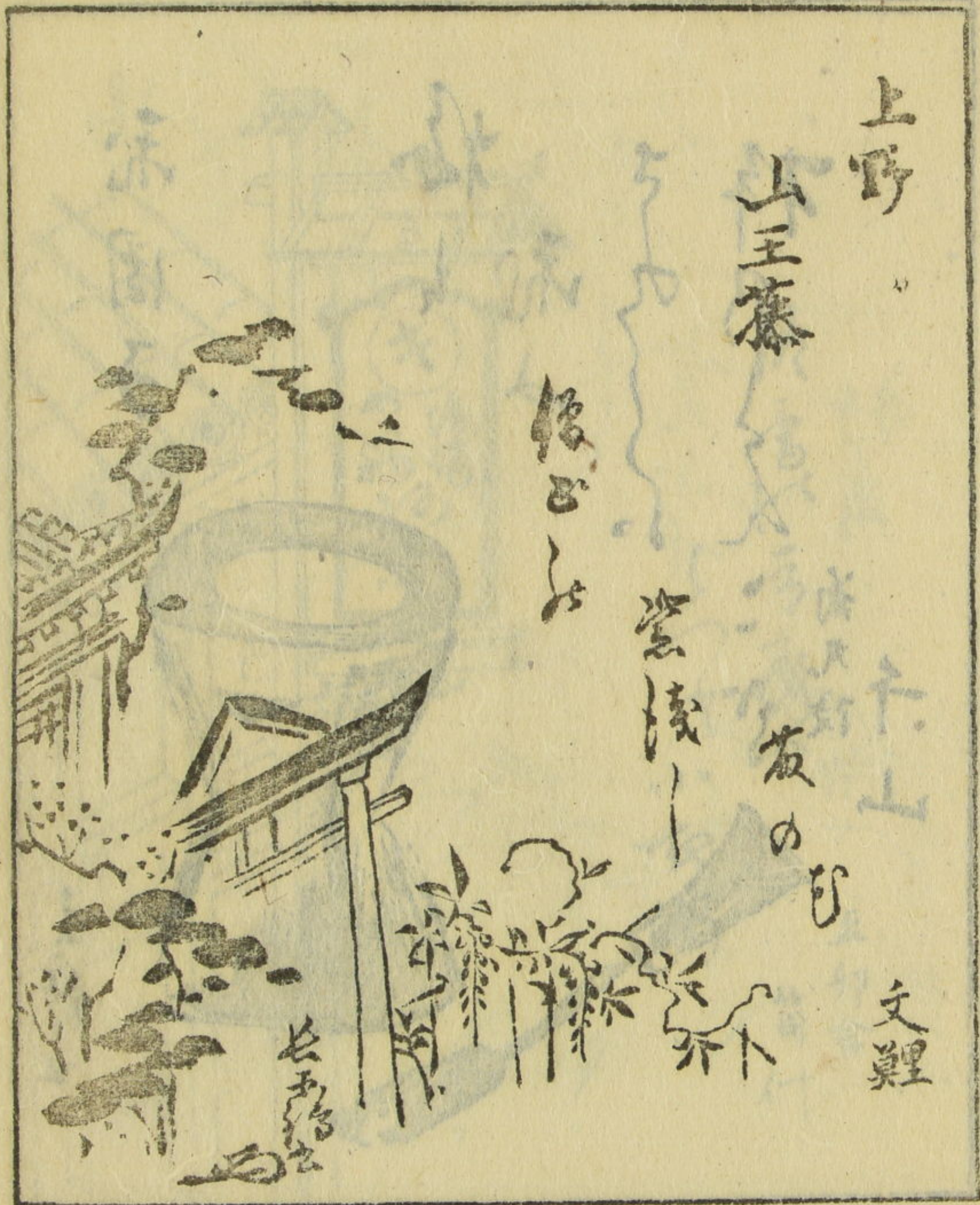
清名く

京屋

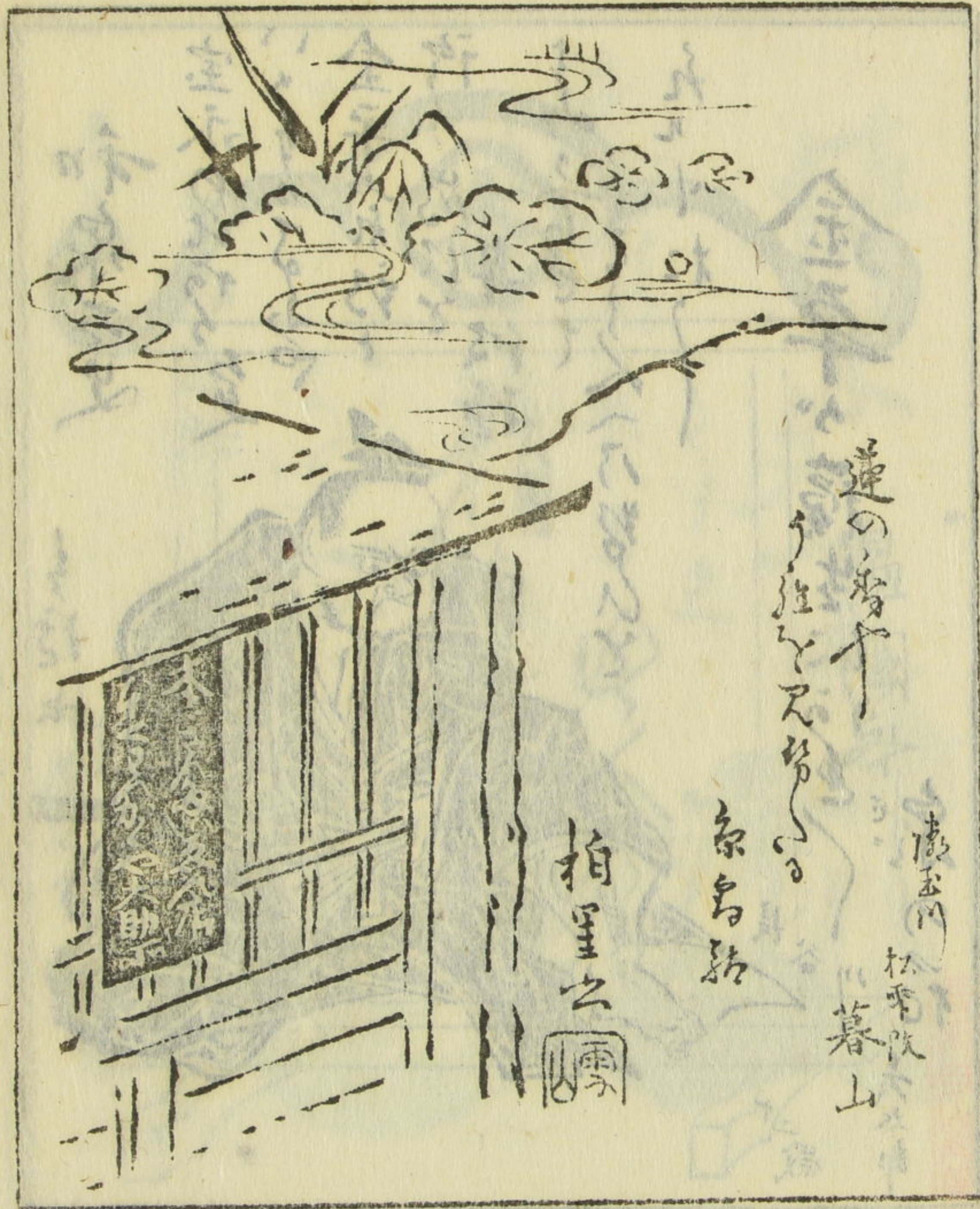
林邊

之悦

雪峯白鳳画








蓮の香  
 夕涼の天竺

糸島路

徳玉川

松平改  
 暮山

柏里之  


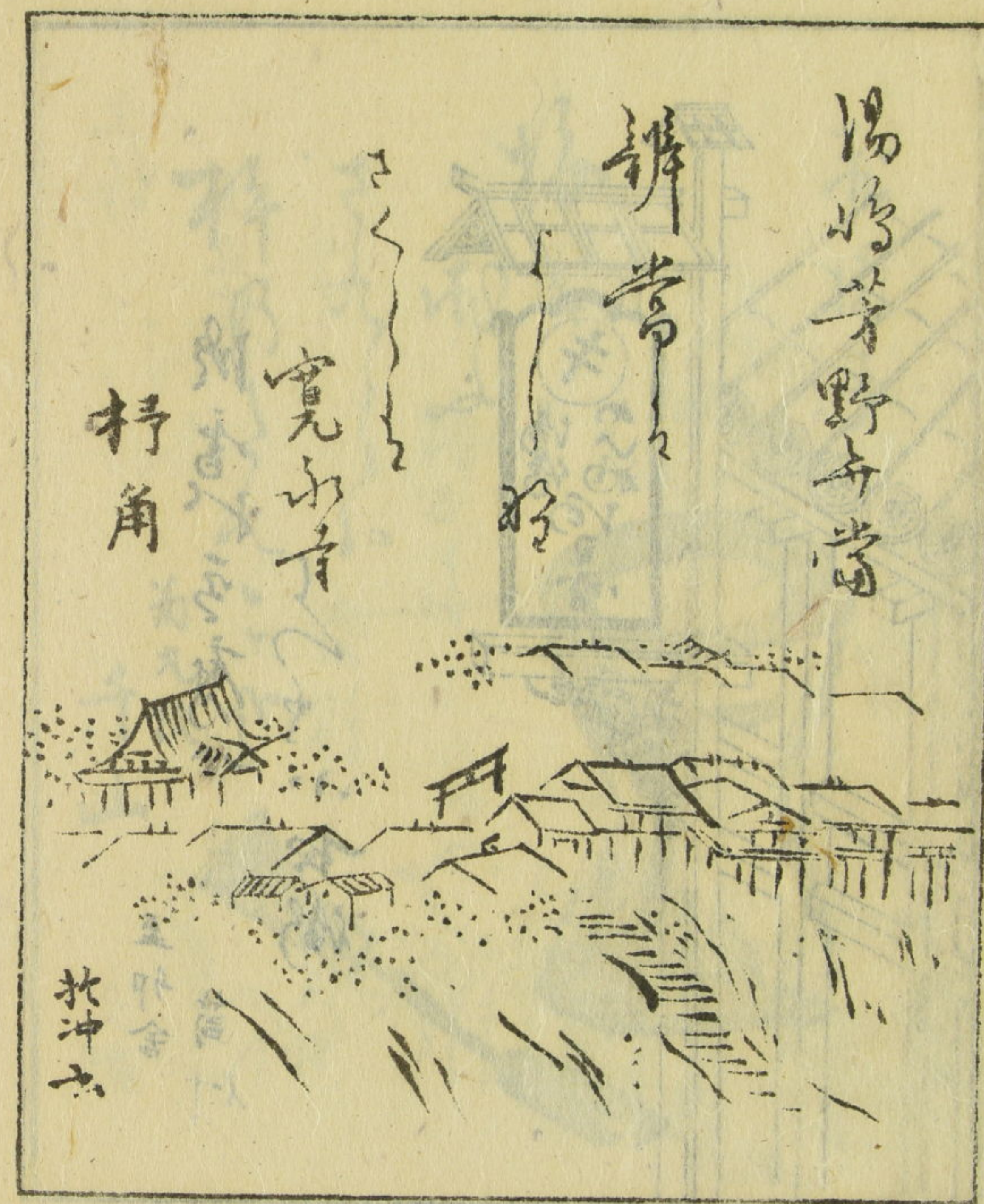
湯崎茅野舟

辨當

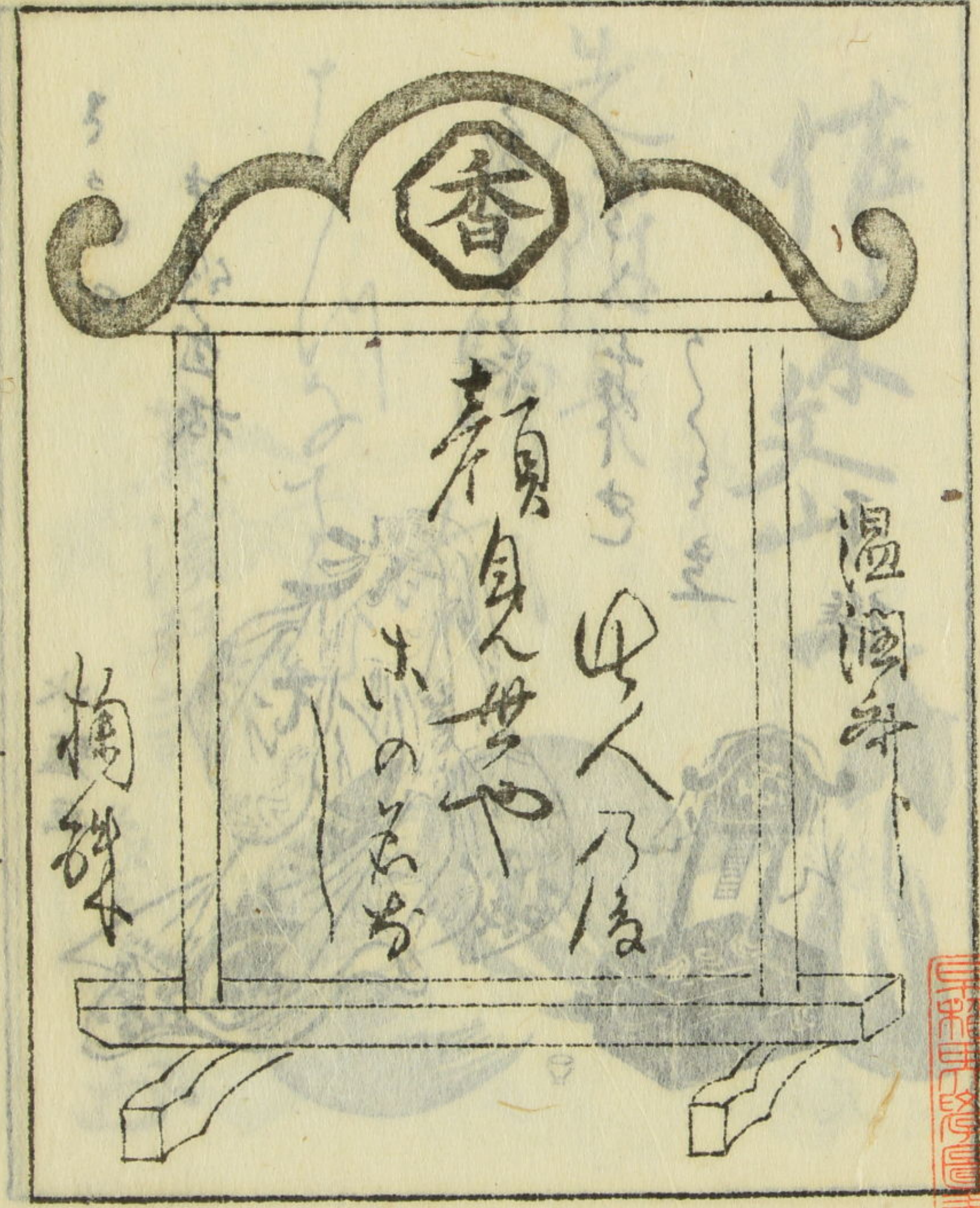
舟

寛永寺

村角



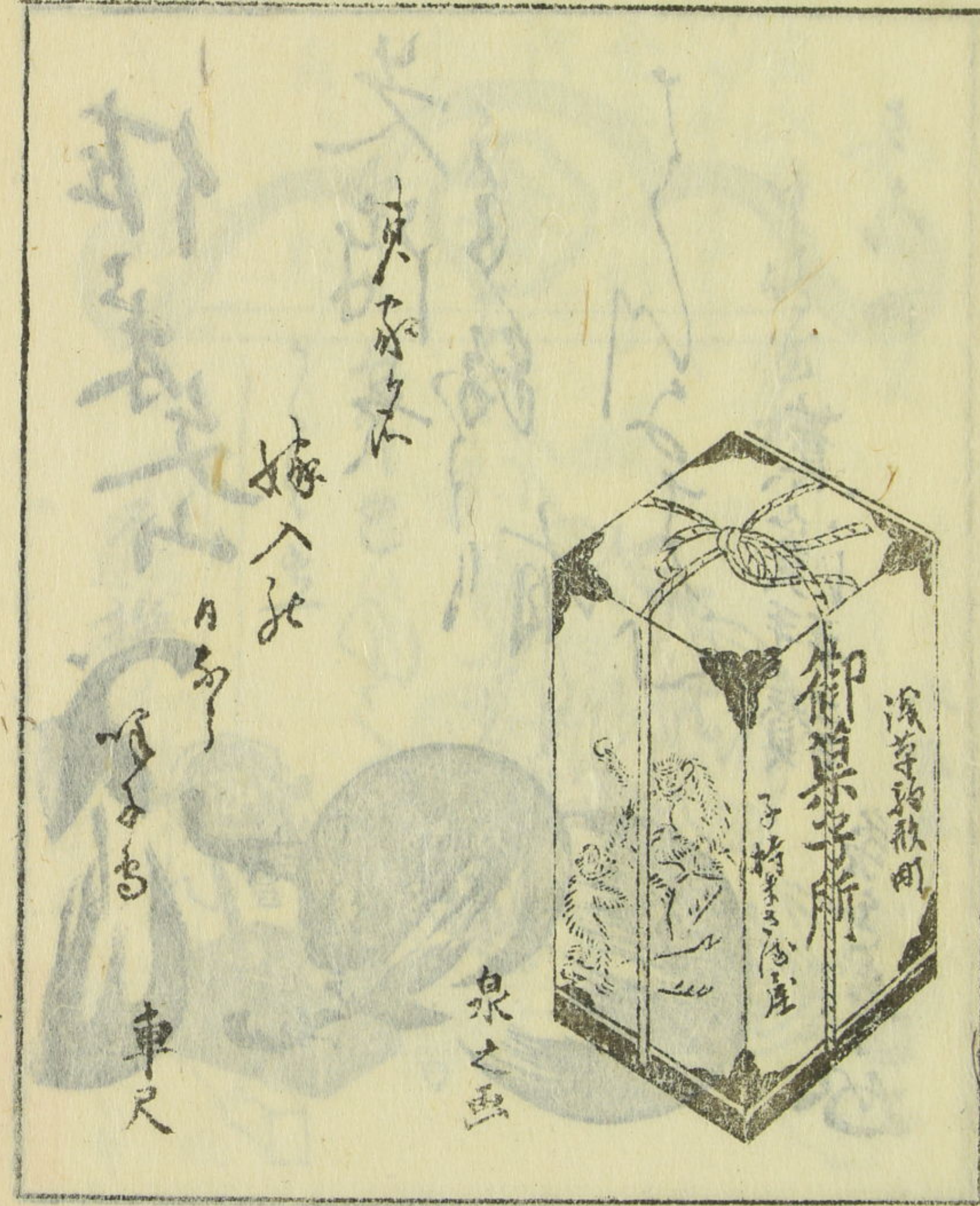
北冲六



長谷川













舟宿

くまの  
つと

の

新

山

岩田  
駒



うん茶女房

一音

止山

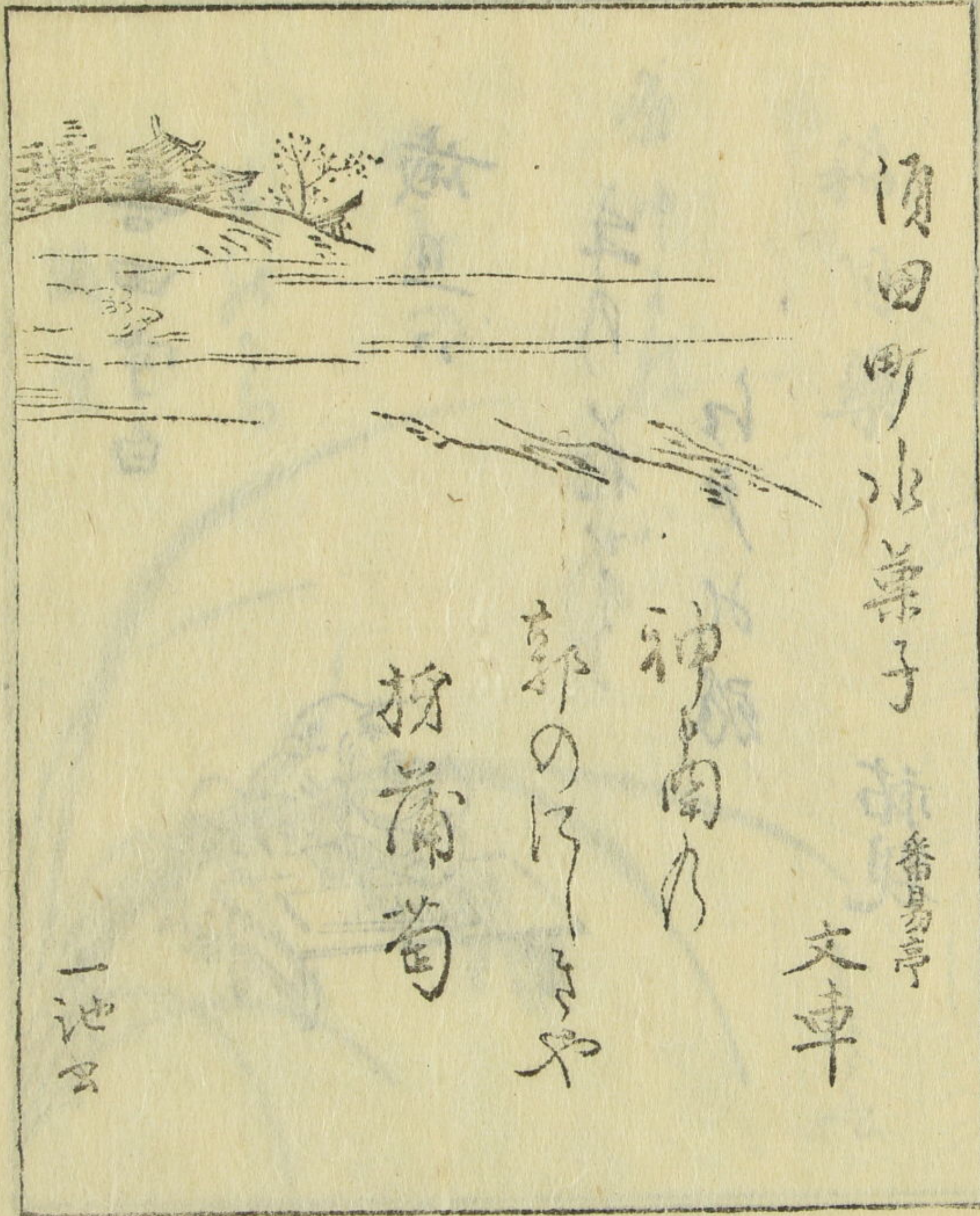
日

く

新

梨の花

静堂上松雨圖



須田町水菜子

番易亭

文車

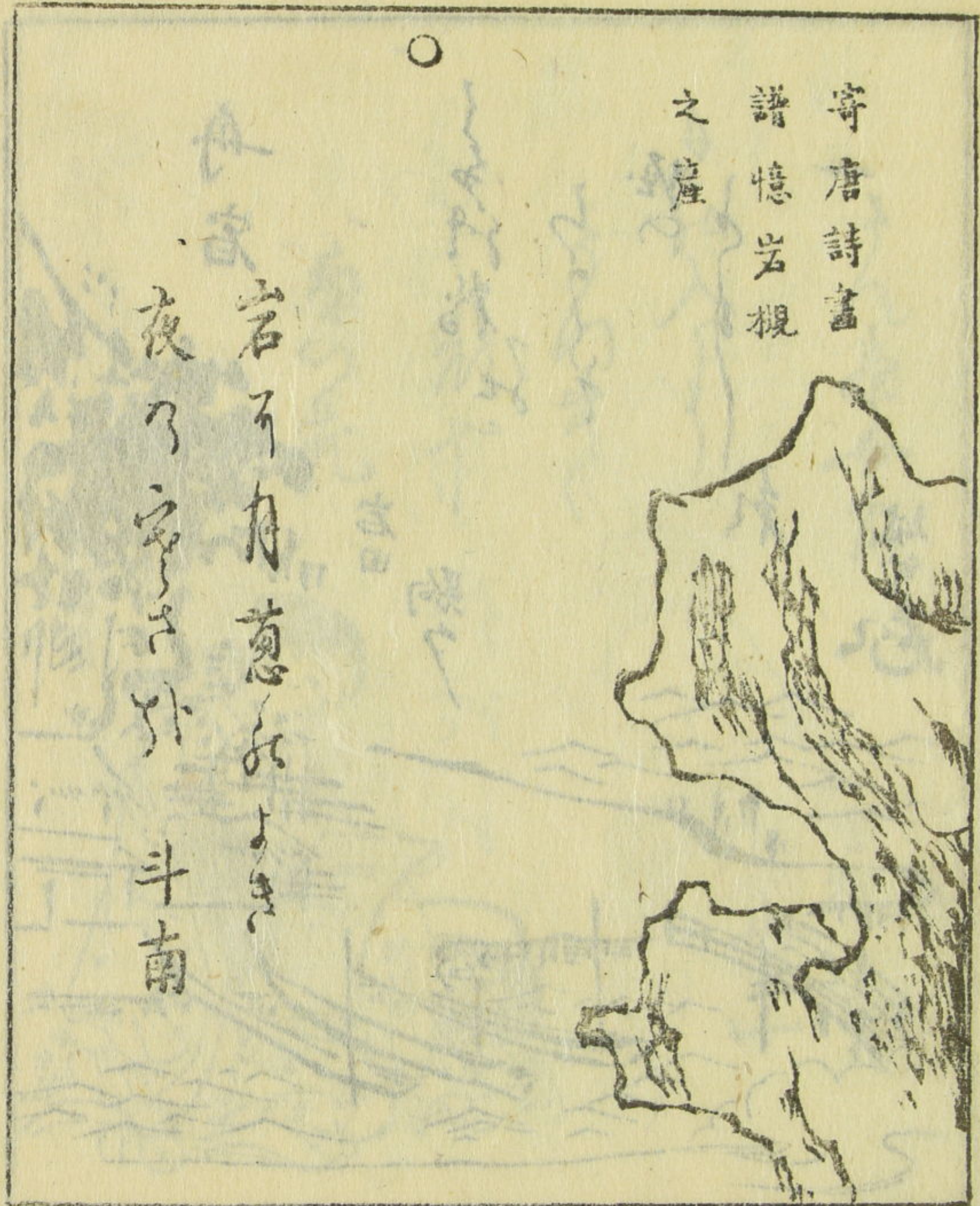
神楽の

都のけしきや

折蒲萄

一池云

下社六



寄唐詩畫  
譜憶岩觀  
之産

夜乃空外斗南

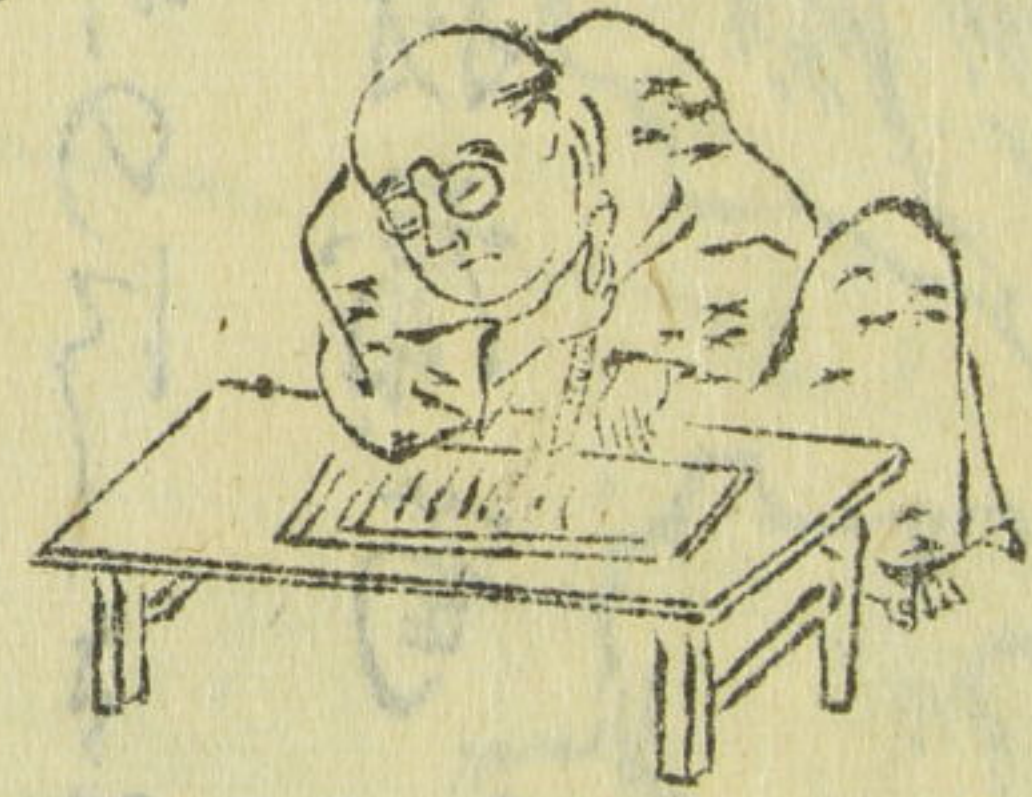
下社六

吉田守白

歳旦ハ

年の花ガリ

江戸丸張



吉田

祐親

箱月薬

壺中の人

あはれ

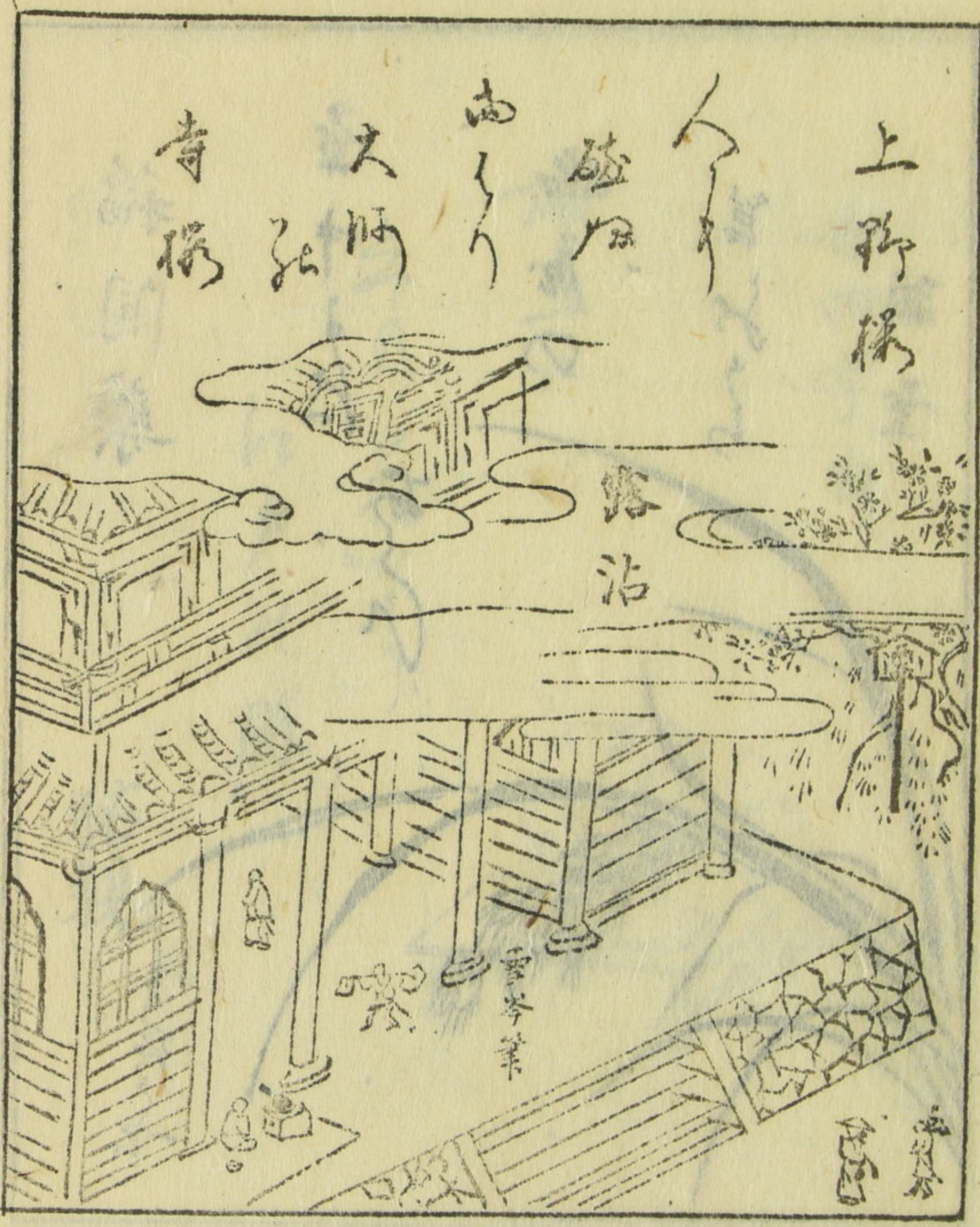
始屋の

善如ら

蘭臺



下



小橋も雪の白く掃き集り  
 又形も水も枯れ入る  
 従者塔の深魚とて東より抱て  
 橋の引くも形遠く  
 白き雪も跡も消し月の隈  
 香炉に干るゝ四角の形  
 候際も雪の堆も給は後を敷  
 休みの芝をいしてついで

三花 露月 幾那 貞磨 千村 巴船 松雨 煮扇

下世八

古い夏書くころつて月夜書	催種
宵に舟へあつて娘引ッ返メ	貞佐
猫の尾よ抜針ありれは仕歌	執筆
窓へ隙の志りーおあは	三花
腰履はゆふまうをさる長月	巴舩
山産使船をさゆらん	幾那
啼もせぬ鳥はつる人ん	露月
角所り〜お籠持ありり	千杵
ふのより書もたけ仲むの歌也	貞磨

名 袴の気よあまゆき	松雨
名 四標とて陽も清しはあゆき	貞佐
扇首と〜り筒はむしり	催種
よわらの鏡をさるるあま	素扇
水の中をさるるあま	貞磨
なわ〜り〜と吹雪り	三花
二人先り〜あは星けり	巴舩
毛纏をさるるあま	松雨
路ぬき〜おは神々	幾那

舞は花子の歌いよるのしるしを	千杵
歌細くや三世初辰	貞佐
其名を肩にしきりも髪を白流山	催種
うはれ重きとねのしりし歌	素扇
兵と己の年より乃記録簿	三花
世は行くかたてきりせんあ	露月
るりへもらんが所は花の心	巴船
戸は雨あふは着高き地とた	松雨
花咲く松の宮よりしりし歌	素扇

連歌も下は高きをいひて

催報

春の歌句

春のけしきよきまをいひて	老嵐
あはれ凍り昼の物いふは	一洲
鯉を飼ふ物いふは	嵐夕
ぬれてはと云作給は	可圭
うけくや鳥の糞より	橋井

四季

乳芽のひびきかへりしきさの鶴の  
血のあまの連くともなりし煙草の  
時をとも唱後よそはけの望みの  
野る春の井うらまぬ歌の  
鬼百合やふ子帖の落る月  
うねる色は小襦のあふる花  
白雨の跡然無のうらま

紫  
雨橋

至的

左

左

舟子

貞郁

貞郁

歌仙  
子五月十八日  
青柳軒是催之

風や九折り元にお貨葉を  
百味秀ひ乃神の御衣  
将人の末細無のうらま  
美しきまきし先を妙詠  
うらまの例にお水湯よこれの月  
樹とよ木村の仕えり  
何折とあく観音の隅編み  
産乳をよとけもよか  
首危を病う人よとけのうらま

貞位

露月

来川

山洲

松雨

撰居

露月

松雨

撰居



今もこの氣中言ひつゝ  
 藤の酒りのほけを数ひり  
 一衣に結る能坂、露  
 旅ひりよるんかやうは是縁光  
 出急賞の船に漕家也  
 切米了是し但後生と解ひ等  
 小幡をく日連して雲の目も月  
 降るハ漏る形離れ高似と

來川 山洲 貞佐 松雨 露月 來川 山洲 撰居 貞佐

可也る月ハ何うの芝居ハ更  
 神々隠しつゝ旅中々見る  
 夏も今電お管と久之を  
 い小堀さののたと仲す  
 古もよ新し夏お赤性  
 柱を斜しつゝ雲と乃噴  
 此日ハ影よ成り、雲お  
 身お世帯といありし入相  
 誰か付て冷おる也毒の言枕

山洲 來川 露月 松雨 貞佐 撰居 山洲 松雨 撰居 山洲 撰居

月くそ星とみゆの紋り

貞佐

藤も秤よりくそ星月露

來川

露とせぬ菊を相敷中毫

露月

鞠子割鞠蹴りともあがり

貞佐

和尚の腹はまのあいのり

來川

冬はく節く蛇の牛も襟

山洲

二三敷のゆぐ男一層

撰居

花子言寄家くの紋は感

松雨

ふう物あがり田畑とあけ

執筆

龍鬼印とよまねの賢者つて大伏獄  
 ありかー莊子博法さうとていつは  
 何はくやてあふ孔子はた知学への  
 遠路ゆきよとて何さんあふあふの  
 かさうと登りては後成定の家は  
 何事ゆつあふ西行の物小加うりな

ゆくはたのりへおろしに林と僧上人  
みりもふん成と金持のこの宝殿  
多に俳風の佳句はかゆくも安  
と画しつゆの梅よりりもたのぬる麻子  
と号よとたのぬるの

伍重軒

露月

嘉祥薰徳是無地  
聖代等倫耽碧粧  
非宴水嬉水独歩  
合歡心路滿林香

牧理軒

佳風

名物と案々  
表  
裏

右史部員外郎朝散大夫迎席

業平橋鏡

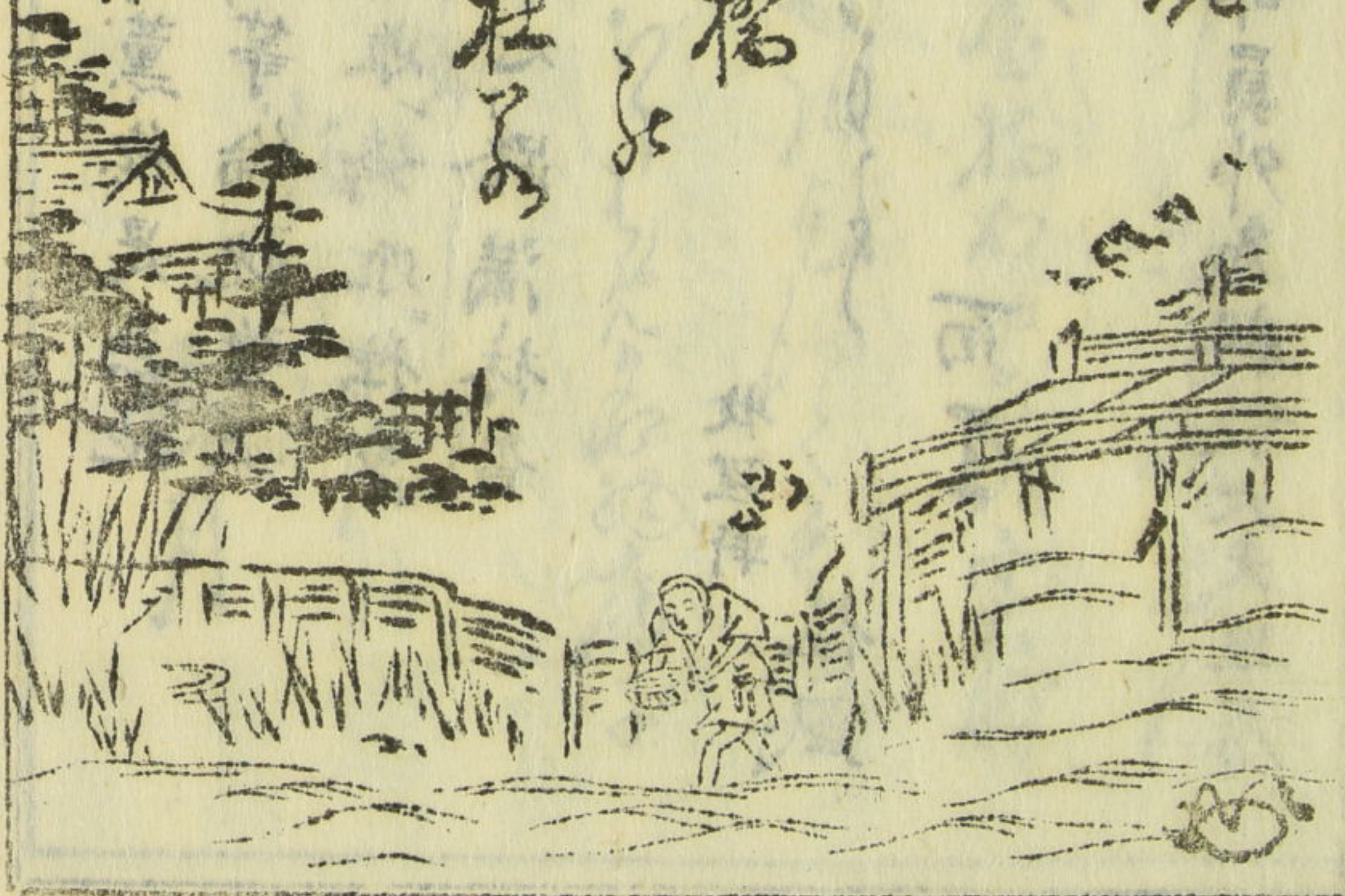
庭了か

業平橋

杜了

寬軒軒

攝泊



滕王高閣臨江諸

三以帶人五湖落

孤勢宮雁傳子

境一之老勃之健

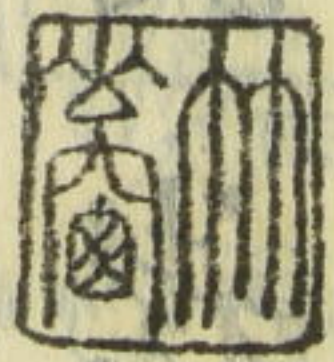
夫緒王閣主人甘會集

不擇賢賤之復

新編江都商賈品類  
瓊玖句之後其為手接  
聯男賢賤不辨其列  
唯為森月子漫書以  
謝其死耳

新王

午寂跋



享保十八癸歲

未秋出板

撰者

豐嶋治左衛門



同 弥右衛門



彫工

吉田治郎共衛



